

東日本大震災から 13 年
東日本大震災及び原子力災害からの復興
東北のまだ見ぬ地域社会への接続を目指して

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の発生から 13 年が経過しました。

被災地域では残された「被災による復興課題」があり、継続的な対応や支援が求められている一方、取り巻く状況の変化や全国に共通する「地域社会そのものが有する課題」との重なる増加により、「復興の目指すべき姿」についての共通認識を持つことが難しくなっています。

こうした状況を受け、みちのく復興・地域デザインセンターでは、市民セクターによる「復興の目指すべき姿を議論する場」を設け、復興の目指すべき姿とそこまでのプロセスを示した「市民がつくる復興ロードマップ（2016 年作成）」を振り返り、「復興の目指すべき姿」の在り方を議論し、現段階における意見を談話としてとりまとめました。

災害からの復興は、自分たちで「まだ見ぬ地域社会」を打ち出し推進する可能性を持つ

災害は地域社会が抱える矛盾や脆弱性を顕在化させます。そして災害からの復興はそれまでの地域社会を問い直し、目指すべき「まだ見ぬ地域社会」を打ち出して向かっていく可能性を持っています。だからこそ、他者から与えられた復興像やストーリーを受け取るだけであることを抜け出して、自分たちで「復興の見取り図（目指すべきまだ見ぬ地域社会とそこに至るプロセス）」をつくりだし、更新していく必要があります。

「まだ見ぬ地域社会」の姿は多様であることに価値があり、統一見解を示すものではない

「まだ見ぬ地域社会」は、一人ひとりを取り残されない持続可能な社会であると考えます。加えて、多大な犠牲を払い復興に汗を流してきた東北は、これまでの過程で見出してきた「災害文化」（災害に関わることで生まれ広がる災害対応も含めた地域の矛盾や課題を解決し、まだ見ぬ地域を創造しようとする活力が高まっている状態）を育てていくことも使命です。一方で、「まだ見ぬ地域社会」の具体的な在り方は地域やテーマで多様であるからこそ価値があり、大きく括り、一つの言葉で統一見解を示すことができない側面を持ち合わせています。

復興には終わりはなく、「まだ見ぬ地域社会」の入り口への継ぎ目のない接続が出口となる

「どこまでやれば復興したと言えるのか」など、復興は「終わり」を求めて議論されがちですが、本質的な復興に「終わり」はないと考えます。その一方で、災害で顕在化した矛盾や脆弱性を課題化し、自分たちで打ち出した「まだ見ぬ地域社会」の入り口に継ぎ目なく接続させることは、結果として復興の「出口」になりえると考えます。時代の変化とともに、DX（デジタルトランスフォーメーション）やRMO（地域運営組織）など、復興とは異なる文脈から接続が動き出すこともあります。東北は、いくつもの「まだ見ぬ地域社会」への入り口に向かうプロセスの中にいます。継ぎ目のない接続を目指して、引き続き取り組んでいきます。

2024 年 3 月

天野和彦 一般社団法人ふくしま連携復興センター

岩崎大樹 一般社団法人オープンデータラボ

大吹哲也 特定非営利活動法人いわて連携復興センター

鹿野順一 特定非営利活動法人アットマークリアス NPO サポートセンター

木村正樹 一般社団法人みやぎ連携復興センター

葛巻徹 特定非営利活動法人いわて連携復興センター

野崎隆一 特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所

本間照雄 地域福祉研究所

（五十音順・所属は作成当時・令和 5 年度復興庁被災者支援コーディネート事業により作成しました）